

文のしおり

## 関西大学所蔵

### 萩原広道の消息（その三）

関西大学図書館 手紙を読む会

#### 一、はじめに

この萩原広道の消息は、「関西大学図書館フォーラム」第6～第7号（2001～2002）に掲載した第一～第七消息の続きにあたる。その解説については、第6号をご参照いただきたい。今回は第八～第十二消息を翻刻した。

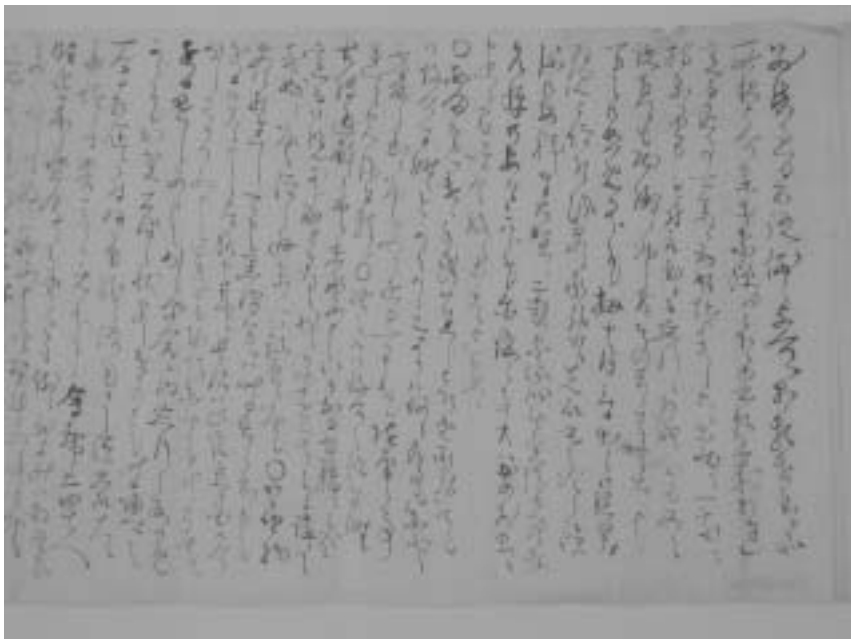
なお、関西大学図書館手紙を読む会のメンバーは、以下の通りである。

森川 彰（助言者）、大国克子、池尻孝子、大塚千歳、長谷章子、  
八尾奈緒美、中川敏子、田中純子、福井智佳子、鵜飼香織

#### 二、翻 刻

翻刻については、次の要領に従った。

- ・ 漢字は、原則として常用漢字に改めた。
- ・ 仮名は、原則として片仮名及び平仮名を用い、変体仮名は平仮名に改めた。
- ・ 踊り字はそのままにした。
- ・ 本文には読点を施した。
- ・ 本文の字数、行数は原形に従った。
- ・ 追而書は一字下げとした。



〔第八消息の頭首部分〕



〔第八消息の末尾部分〕

「第八消息（嘉永三年十一月十四日）」一六・四×九二・七糧

別番過日相認、例之与介へ相頼遣置候処、

一昨夜与介参、貴家様へ被下候御書類三封相達、

定而返事可参と存、右拙分さし上候書状も、一処二

持参候由申候二付、取置候而延引二相成候へとも、又々

認直候も面倒二御坐候間、そのまゝさし出し申候、

万々御恕免可被下候、初十月三日出之御懇書

拜見、被仰下候趣夫々承知仕候、先以寒冷之候

弥御安祥奉大賀候、二弊家依旧無異消光仕候条、

乍憚御安意可被下候、尔後之事共八かの別書二

申上候間、唯今般之貴答迄申上候、

西田方へ遣候手筈御達し被下候由承知仕候、

御役介奉謝候、とかくかしこより八何之返事も参不申

不審之至二御坐候、又々近日可申遣候随筆之事、

連々御心添奉頼候、野之口御役介之段奉謝候、

古伝通解とやら未承不申、いかなる書籍二候哉、

定而御覽可被成と奉存候、少々御聞せ可被下候、講ノ一

奇妙二御坐候、仰之通参候へ八珍重二御坐候、御届物

夫々相達し可申候、黒沢方へ八昨日遣し置申候、

近日御答さし上候様申来候、長沢八此節京か国か今

少しわかり不申候、此方分も帰後未無音仕候間、幸二

近日遣し可申候、少し聞合候内、延引之段御免

可被下候、加賀、大津之状早々遣可申候、昨日帰郷之

一会相企候二付、何角紛々俗用さし湊、夫故大二

多忙二付喜答御免可被下候、会席上四十人

余、近来之盛会二て御坐候へとも、例之哥よみ八鄙吝家

多く、少しも為二八成不申、唯勢斗の事二御坐候、

御笑可被下候、木葉鯨沢山御恵被下、忝奉多謝候、  
かれひ八まゝ御坐候処、めはる八珍敷奉存候、追々賞翫可仕候、  
併遠路決而御配意八被下間敷候、此段御断申上置候、

金式歩式朱御越し被下、慥ニ落手仕候、御手支之段

逐一承知仕候、併別帛申上候通之義二付、可相成八

当月中二八不残相届候様、御働被下度奉頼候、

此月を越候て八、野生の不残遣し不申候て八、後日二大ニ

手支仕候上、不評之端二相成候事故、殊外迷惑仕候、

此段別帛申上候通故、重而八不申上候、万々情景

御憐察可被下候、弘氏へ八未文通不仕候、近日中

御屋敷之所尋候而、遣し可申と奉存候、かしこくれ候迄歩

式朱八、此方の鎮座考之代式方金遣候二引合、さし引

可仕候間、小夜しくれ之差引と八別之事二被成被下度候、

此段別而御頼申上置候、玉石集之事承知仕候、

春部八タンナニ而校し市川へ遣置候間、定而相達し可申候、

雅板下校合早々秋田屋へ遣し可申候、一昨日太右衛門二

久しふりニ而逢候而、かの書之事承申候処、広島より八

頻ニ上木せがみ来候へとも、不残出来もせぬ事二候へ八板を

ほらせて待候金二利足かゝり候間、広島之方出来次第

何時ニても早々ほらせ可申候、とやうニ申居候間、能々急かし置申候、

左様御承知、惣五郎彫御急キ専要ニ奉存候、且又

長沢鴨川集ニ撰残之分、老兄へ御おくり申様

認候二付、書林など八長沢の撰残したる物を貴兄ニ進上

仕候なれ八、鴨川より巻中之哥八わかるるへし、などゝ存候由

承候故、并し置申候、されとも俗物八せんかたなきものにて、

能々うけかひ候体ニも無御坐候、猶又并し申へく候へとも、

かの体の事八尔後御用意あらまほしく奉祈候、

これ八聞流しても濟事ニ御坐候へとも、任御心易内啓仕置候、

すへて大勢之人ヲ集候事八、色々の人物あるものにて、  
実ニうるさきものニ御坐候、其評語など一々聞入候様にて八、  
ならぬ事ニ御坐候へとも、よく御思案被成候而、御筆被成  
度奉祈候、玉石集ニ編料之事承知仕候、併

是八先一編発兌之上ならて八、妙ニ無御坐と奉存候、

色々申遣候方も御坐候へとも初篇も未見え不申事故、如何と

存候哉、一向おこせ不申候、夫故此方も催促不致候、一篇

出候へ八其後八案内易がるへくと覚申候、但し師家ならぬ

者ニ少々上木料出させ候との一挙八、決而成ましき勢ニ

御坐候間、これ八必御止可被成候、此表にて諸芸之師ニも色々

懇意之者御坐候而、承合試候処、哥よみほと下戸と

シワソボの多き八無御坐候、夫故百文二百文之事ニも、

毎度ワリ合のもめなど出来、苦々敷事の極ニ御坐候、

其位の人物二三百五百ノワリ合懸候八、決て出さぬ上ニ

悪評の端を開へくと察候間、コレ八必御止可被成候、諸平も

近来八謝物ヲ取候とか申事ニ而、評アシキ八皆コレヲノ

趣と聞え候間、利益之方八書林と御談被成候て、それをも

人ニ聞せぬ様ニ可被成候、是一大関係ニ御坐候間、深く

御禁申上候、失敬八御免可被下候、概して申候八、少しニても

割合のかゝる物八、哥よみ連中へ八いはぬかよいと申

ほとにて宜しく候、夫故愚生活計之苦しきなど

万々御遠察可被下候、校合野生へも御心配御坐候よし

是八決而御無用ニ可被成下候、畢竟御心易ニまかせ失敬

申試候迄なれ八、少しも内職之内へ八入レ不申候間、御安心

可被下候、かやうの事も皆板元の利益の内より致候事ニ而

御坐候間、尔後もし其御つもりも御坐候八、始より校合八

杏枝二何ほと、申様ニ被成候へ八、上木之料ニくらへて八九牛一毛ナレ八、

何ともなき事にて早速受合候事ニ御坐候、是八為御心得申上置候迄也、

天満宮奉納哥相心得申候、色々配置候へとも、例之刻料の事ちと御坐候故二や、未一人もさし越不申候、寄次第早々さし上可申候、但是又多分八より申間敷

御心得二被成可被下候、情景八右二申上候通也、契沖之哥

御苦勞二御坐候、早々遣し可申候、御流筆奉多謝候、

いづれも面白く感心仕候、名所凶会八東海道之通二て

よろしく御坐候、与介事折々相尋くれ申候、同人へ

御状被下候御返事、野生へ頼別幣二認さし上呉候様、

返々申候而、其つもり二居候処、薄暮さしかり候故、

別二八認不申候、其御つもり二御聞取可被下候、第一は

尊大人御病氣之体、能々相尋御慰問可申由、第二八

同人母親之事能々御頼申、且母へ御便之節無事二居候旨

奉頼事、第三兄弟萩へ参居候とやら、其男商買二ても

始候哉、心二かゝり候間、御尋申呉候様との事二御坐候、後音

何とか被仰遣可被下候、書外色々可申上候へとも、先当便八

如斯御坐候、乍末皆様へ宜様御伝声奉頼候、誠二く

短日之忿忙如舞如走、何ひとつもなり不申、万々

御察し可被下候、その上身上色々混雜の事有之、

実二困入居申候、猶又後便委可申上候、草々不宣

十一月十四日

広道

鈴木君

几下

尚々時氣折角御自愛

十月三日之華翰一昨十一日相達候へ八、大方四十日近く相成申候、

毎々如斯

延着二て八、困入申候、爰元御蔵屋敷など二御知音八無御坐候哉、い

つれ権勢

ならて八、下人八つかへ不申候間、御一考可被下候、西国筋手幣延引二八こまり申候也、

〔第九消息（嘉永四年二月廿八日）一六・七×五五糶

別封さし出候哥類、追々相集り居候分さし上、

夫々御握手可被下候、兎角せ八しき二紛れ催促等

行届不申候、夫故誰も持参不仕、尤当地辺之風八、

か様之事二甚出しかね候人氣二て、こまり物二御坐候、

野寄武左工門八、尾道便二さし上候とか申候間、

二三帖さし越候哥御坐候へとも、貴方へ八さし出不申候、

隨筆追々集り、も八や二冊位二八なり可申候間、

近々引集メ見可申と存申候、昨年さし上置候

草稿類、近便不残御越し可被下奉頼候、直養も

からうして当春文通いたし申候、近々さし越候様

申来候、同人たに出し候へ八、あと八大抵二而編集可仕候、

近藤氏八已二出立と覚申候、如何之様子二御坐候哉

御きかせ可被下候、九州行も米高二て、定而妙二八参る

ましきにや、上京之沙汰八虚にて御坐候哉、

此辺伴雄八在国無事、諸平八ヤハリ出勤せず、

何角子細もある事とやうく聞え申候、翁満八来月

中旬帰国、春夫八原見と申河内在へ引越参申候、

東雄八間口五六間の大宅へ引移、勢ひよく見え申候、隆正、

長広先無事と見え噂承不申候、

熊谷直好七十賀、ふくやと申料理屋二て此八日二致し候、

呉服店より大海老の作り物なといたし、床二鏝り候由、

妓ヲ二十人はり込候者も有之、翌日八北新地住吉屋と申

大妓楼にて大宴したりとの事、珍なる哥会二候へとも、かの流義八俗物の信仰如此ものにて、妙なる事二御坐候、此方など八不相替々々、二朱の会費ヲ持参せぬ者多くこまり入申候、御一笑々、何分俗二近きほと信者講中の多きものと見え申候、世間惣来如此、

井筒屋承候へ八、隆正八昨年故藩津和野へ帰参にてヤハリ在京、当春とか江戸へ出候との事申来候、慥二左様之事二候哉、此辺二而八一向不承事二御坐候、尤書通致候ても、いかなる事二や返事も致不申候、夫故歎も未不申遣候、但し風説となら八却而如何とも存候間、内々御尋申上候、貴君二八かの藩二御知音も

多く御坐候御様子、何となく御聞繕ひ可被下奉頼候、津和野にて思ひ出し申候、岡熊臣の難論二答へ候もの認かけ候処、其書一向只今見え不申候、後音まで延引仕候、兎角何角取ちらし勝二候処、愚妻俗物一向無頓着候ものにて、こまり果申候、御恕免可被下候、

翁満之哥八も八や参候哉、今般長沢などの分一冊二いたし、さし越候へとも、紛ら八しく候故、先紀州へ遣し申候、もし未無御坐候八、長沢分取返しさし出可申候、弘よりもたのまれ困り居申候、思ひの外よらぬものにて、さいそく二八閉口仕候也、

世界兎角むつかしく困入申候、さりと八哥商賈八不景気なるもの二御坐候、何そ家業初メ可申と存候へとも、元手のなきにて何事もならず、残念二御坐候、先達而御頼申上候筋之事、呉々御考置可被下候、やくもなき小説などにて糊口して八、哥にて損ヲいたし、隙をのミ潰し候内、次第二年寄二成候て八、何ひとつも不相成候、憤慨満胸実二いきとほろしき

事二御坐候、高橋氏八帰郷と奉存候、御蔵書八返上仕置候、かの下しらへあら々奉頼候、これも迷惑なから一応こしらへ遣し申度候、何分秋二成候八、参上可仕相楽居申候、

書外色々申上度候へとも、先さしか、り如此御坐候、万々後音可申上候、大乱筆御免可被下候、以上

二月廿八日 広道  
櫛園賢兄 玉几下

「第十消息(嘉永四年三月廿五日)」一六・四×六〇・九糎

福山松本長兵衛へ御書被遣候御返事、今度八不申上候よしにて、哥斗おこせ申候、同所之御講論も明年よりとか、申越し居申候、

春暖之節益御清福奉大賀候、御次、僕如旧御放念可被下候、何やかや申上事、如山御坐候へとも、去儿十六日の上京、廿二日帰坂、用事輻湊二付、近便二と省略仕候、別封ともあまり多くつとひ申候故、先ツ御届申上候、此節

藤井高雅も上坂、一処二上京いたし申候、翁満も明後廿七日帰国いたし候、伴雄八四月朔日の上京、多田湯治二参候との事也、春夫八河内内へ引越参り申候て、未昨年より逢不申候、なに八、残夢も死申候、直好と野生八かり二相成、さて、寂寥二御坐候、

京にて長広二八逢申候、他八留守にて  
逢不申候、何やかや色々申上度候  
へとも、実二よほどの多忙と困窮の

大屈度出来居申候、何事も手二付  
不申候故不申上候、さりと八御高察  
可被下候、上京中哥八やくざもの  
数首よみ申候、嵐山にて

うつし植し 吉野のさくら

こゝにても

雲とそ見ゆる花のあけほの  
名にたてゝおろすあらしの

未見えて大ぬにかゝる

花の白波

大悲閣にて

ふけ八ちる うきよのさかのおく二

こそ

あらしこもれし 花は咲けれ

など猶色々御坐候へとも、さのミ八とて不申上候、

京のやとりにて夜雨を聞て人間万事

塞翁馬と申古キ詩のこゝろを思ひ

出してよめる、

世の事八 きたの翁に

あつけおきて

ふるにまかせし 春雨のやと

かの聴雨眠と申二思ひよせたるにて候、

されとも世事八むねにみちて憤ろしき

事八かり、何卒右哥のやうなる世にと

ねかひ候斗也、めて度かしく

三月廿五日

ひろみち

鈴木ぬし

御もとに

時氣折角御自愛奉祈候、以上

「第十一消息（嘉永四年四月十日）」一六×一五四・八糶

再度之玉章相達し、忝拜見仕候、殊二三右衛門殿

御立寄にて拝話、御様子詳二承申し同子御再訪も可被下

哉之由二付、御返事及延引多罪之至二御坐候、あまり

遅引仕候故、概畧相認差上申候、竈漏八御恕免

可被下候、玉石集追々御撰定相成、右二付私へ

校合被蒙候由、先日井筒屋も承委曲畏入候、併

例之竈忽故御益二立候様之事八有間敷候へとも

一応拜見八可仕候、尤已前下巻ノ首五枚井筒屋へ

参り一見後八今般広島市川氏へ三葉参候斗二て、

其余八如何相成候哉、存不申候、何分参り次第拜見

可仕候、随而今般之三葉中、少々愚存も有之候二付、

別幣二認入御覽申候、夏蔭、諸平八有名家故、此位の

事八御捨置候ても宜しと奉存候、改め候へ八、殊外やかましく

申候よしも、承候事二御坐候、尊大人之御詞書も、少々

愚論申上恐入申候、是八思召二て何となく御伺可被成候、

速雄と申八誰人二や、存不申候へとも心付候まゝ申入候、

是又妄二八改めかたく御相談申上候、惣体ひか事あら八

拙方二て改様被仰下、承知仕罷在候へとも、一存二も

難参事御坐候分八、奉伺候、名もなき人の分二而決め

たるひか事なとも、もし御坐候ハ、夫八珍重可申候、さて右之板下ハ、秋太へ遣し可申候、ほり上候上にても此位の直しハあたりまへにて御坐候間、其刻御直させ可被成候、

広島市川氏之書状も参り、精密之至感心仕候、

巻首之論ハ哥既二秋太へ遣し、覺不申候間、出来之上引合、かの説之通改させ可申候、再応之処ハ是迄参り不申候、参り次第引合可申候、

西原晁樹、西田直養事承申候、直養ハ在分へ引籠、

風流之家作等いたし、静二楽三居申候よし、風の便二承申候、晁樹上来候ハ、対面可仕相楽居申候、玉詠

之事承感心仕候、拙詠の御評感謝仕候、但し此結句

しつなと留候ハ、普通にて不面白、何ぞ御工夫ハ有ましくや

御相談申上候、無御遠慮御示し可被下候、拙編心の種、

葉山の栞此節発行致し申候、併は八書林へまかせ

置候而、蔵板にてハ無御坐候故、私手ハ出し不申候、錦地辺

書林へハき八めて参可申上候、もし参居不申候ハ、早々

さしおくらせ可申候、尤秋太手にてハ無御坐候、河喜、藤善

などの手より発し申候、御一左右奉頼上候、山川

正宣事承知仕候、後便何とか御申こし可被下候、

古学通弁之事承申候、同人へ御書通之事も承候、

業合大枝事八国二居申候内、随分心易くいたし、

同人方へ参逗留したる事も御坐候へとも、此表へ参候、

已後ハ殊外便宜あしき処にて、互二文通も不致候、

小生が従弟岡山儒者にて、大枝が子二授業致候事も

御坐候而、其方より書通等も致候へとも、是又近来ハ

岡山二而繁多二相成、参り不申候故、手次無御坐候、

今少し御待可被下候、誰そ二託し可申通候、貴御宮

御年祭二付、奉納哥御勸進之事、すり物両度被下、

御附託之旨承知仕候、追々諸方へ遣し居申候、併

か様之事毎々たのまれちらし候処、案外二よらぬ物

にて困入申候、其上多忙二居申候故、毎々手帛さへるく二

認不申候、さいそくも行届かね候間、成否之処ハ必

とも御請合申かたく御坐候間、此段ハ御恕免可被下候、

四国八土佐辺二ゆかりも有、大和路二も御坐候間、遣し

置可申候、其外短尺之御入用之事も承申候、併

是又繁多之中二而、忘失かち二御坐候上、諸方より

か様之事度々申来り、誰々二も毎々か、せ候事故、

あまり二気毒にてさしひかへかち二御坐候間、差当り

火急之御入用二も無御坐候ハ、緩々御待可被下候、追々

集メ置さし出し可申候、大方珍らしき人物にて、少し

学問気も御坐候人二ハ、大抵五七枚ツ、ハか、せ候へとも、

諸国より出かけ候人など二、肴物のかハリ二遣し候など仕候而、

一向手元二滞り不申、今般短尺帖と申ものを

こしらへ、御辺へ出かけ候節の用二備へ可申様、人の勧メ

候にて取立かけ候処、一向無御坐候故、門生など二もらひかけ

候処、さてくくれぬ物にて腹立しまゝ、長沢へ頼遣し、

かしこの物数枚もらひ候而、事を果し申候、其余り

少しハ有之候間、参上の砌御配分可申上候、いはひ島

大蓬の杖かしこの儀右衛門と申長寿人の突初たる物

御患投被下、千万辱奉多謝候、いかさま二も珍らしきもの二

御坐候、且又儀右衛門書も御患被下、珍らしく一見仕候、何

卒半二てもあやかり度もの二御坐候、御社中二哥合

御出来にて愚判可仕候由、御深志之趣呉々忝承知仕候、

早々御越し被下度所希御坐候、私社中二もとの御事

承知ハ仕候へとも、昨年来人の出入を厭ひ候而、格別二も

人寄を不仕、哥会なども廃し居申候二付、するくとも

行八れ申ましくと奉存候へ八、此義八暫時御延引可被下候、  
 大方哥合、扇合など申事を企候へ八、社中のはけ三二  
 相成候事故、前年八度々いたし候へとも、殊外世話のやけ  
 候ものにて、大方其事二ひたり居不申候て八成就不仕、  
 遅引二相成候へ八、早く出したるものいひ事を仕候など、わつら八しく  
 困入候上、その辺の事ヲ執候門人やつの者も無御坐候二付、  
 悉皆止二いたし居申候事情、万々御高察可被下候、  
 且又、かゝる事を企候など申候へ八、一人ツ、認めて遣しなと  
 仕候二、代筆の書生さへ居不申、自分二計ら八ね八  
 なり不申、さて八いたつらなる事二のミ光陰ヲ費し候  
 事故、左様之事も難仕、さて〳〵困入候事共二御坐候、  
 これら八、拝顔之節、情態御咄申上候へ八、御氷解被下候  
 事と奉存候へとも、余り〳〵何事も御断申候故、申訳の  
 ため認上申候、万々御恕免可被下候、百人一首の  
 句題にて五百首御と〳〵のへ御上木之由、いと〳〵面白き  
 御趣向と奉存候、夫二付愚生二も出詠可仕旨承知  
 仕候、但是八本哥の意二よみ候事二や、又八本哥を転して  
 他の意二致候所主意二候哉、今一応御示し被下候、  
 さて此義も諸方朋友とも二出詠させ候事、御託し被下  
 承知八仕候へとも、又々例の長く相成可申、且当地にて八  
 さしたる者も無御坐候上、例之集め候二こまり入候間、  
 可相成は私分斗にて御高免被下度候、併先五六題八  
 申受置候而、慥二相すゝめ可申候、何分二も手元多忙  
 瞬息之間も油断のならぬと申様なる世界にて、何事も  
 不風流之事斗二御坐候間、呉々御高免奉希候、もし  
 又此辺之者入不申て八、をかしからすとの思召も御坐候八、  
 其よし例の小キすり物などにて、御越し被下候へ八、早々  
 諸方へ申遣し置可申候、左様にてても大抵過半八

それなり二相成可申候、毎度之勢ひにて御坐候間、  
 此段御深考可被下候、旧冬申上候小夜時雨差出候  
 部数相違仕候よし、多罪之至二奉存候、一向乱雜二  
 取扱ひ候事故、色々之間違出来仕恐入奉存候、  
 返々御恕免可被下候、右残金式歩御送り被下  
 慥二入手仕候、出定笑語且小夜時雨十五部ノ分も相届候  
 よし、是又後音御算用奉希候、中臣被  
 正訓二部御送り被下、拜見感心仕候、此節旧友藤井  
 高雅備中ノ参居申候、同人門人堀家東馬と申へ  
 一本譲り申候、高雅も感心致候、且同人義もかの被ヲ  
 神前二よみ候考有之由申居申候、後音御尋合可被成候、  
 随分おもしろく聞え申候、東雄、長広、成昌、宗梁、  
 春夫などへ御文通可被成旨、御紹介之事承知仕候、  
 長広、宗梁八随分御返書も可致候へとも、其余八大抵  
 等閑かち二相成可申候と存候、長広住所八京都  
 烏丸通四条上ル所にて、大橋九右衛門と申寺子屋二御坐候、  
 此人純粹之本居家にて、京にて八先此人第一之様二覚申候、  
 随分温なる人物にて御坐候、物の考、てにはのせんさく杯八  
 しひて八いはぬ人二御坐候、秋元安民事、先日小生方へ  
 参り十日斗逗留致申候、同人事も今般姫路にて  
 国学師範二被召抱、学館ヲ預り教導之旨被命候、  
 微禄にて八御坐候へとも、書籍類二八事ヲ欠不申候、追々  
 錬磨致候八、彼八よほとどの学者二相成可申と存候、  
 同人へ八必御書通可被成候、才子と申体二八なく候へとも、  
 愚生なとより八書籍八博く見申、考証学など八  
 よほとたけ候者にて、伴信友甚愛し居申候男にて御坐候、  
 野之口隆正門人にて候へとも、学風八伴之風にて御坐候、  
 藤井高雅も今年六年めほとにて逢申候処、同人も



殊外見解かハリ、学業よほと上達致候体二見及候、  
未当地二居申し、近日帰国可仕候、同人と八かねて御書通も  
被成候よし、随分宜御事と奉存候、其外無益之

人八大抵二被成置候てもと奉存候、備中笠岡二

関立介政方今八島翁  
と号し居申候と申者御坐候、素の御なしミニヤ、

同人事八よほと音韻語学の源ヲ究め候人物にて、

野生なとより八兎角可申様も無御坐候、もし御知音二も

無御坐候ハ、御紹介可仕候、必御文通可被成候、黒沢翁

満事モ八ヤ近日二罷歸申候、是八至而風流客ニテ哥文

八奇妙二御坐候上、語学もよほと致候体二御坐候、是又

追々御書通被成候ハ、御取次可申候、当地へ出候人之内にて八

当今第一等之人物二相考申候、東雄事八神道ヲ

ひたもの信する人にて殊勝二御坐候、長刀を帯慷慨之事

斗申候故、世二八容られぬかち二候へとも、志八あ八れ二御坐候、

学業八末々の事八あしき様二見え申候、当日貧二こまり

入候事故、御書通なと被成ても多分捨置可申と存候、

されとも至而心易く致候間、いつ二ても御取次八可致候、

岡田氏人質之事被仰下承知仕候、されともかしこにて八、

人物と見え申候、何分不評二八こまり入候、ほとよく被付合候

へ八よほと奉存候也、先日中一両度文通仕置申候、

御近況宇部と申へ御出張、其後広島、岩国辺へ

御遊行之由、此節八如何と奉存候へとも、先錦地へ書状

さし上申候、早々相達候ハ、御返事必奉待入候、私義も

一日も早く罷出度と存候へとも、誠二色々の煩累御坐候上、

旧年之齒痛、頭痛再発、大方平臥かち二居申候而、

見合居申候、発船仕候ハ、必前以御左右可申上候、

呉々宜奉頼上候、乍末筆尊大人へ宜様被

仰上可被下候、恐惶謹言

四月十日

萩原鹿蔵

(花押)

鈴木賢兄

玉案下

尚々時氣御自愛專要奉存候、御密封之事承知仕候、

毎々御心付奉謝候、かやうの事仕候ハ、いと易く候へとも、板

行の扇二て八此辺二て八、得心せぬ風義も御坐候、錦地辺

にて八随分行八れ可申哉、今一応御示し可被下候、玉詠

忝一笑一感奉謝候、先年よめる哥申上候哉、未覚候故

序二認申候、人しら八猶あちはへや さくはなの

おちてはえなき このみなりとも 御大笑可被下候、

日高春国事真寔也春国事先日江戸鈴木重胤より申越候ハ、

所々二て金ヲ借ありき不評之由、近日落城いたす

へく拙子と心易きよし、弥左様二やなとやかましく

申越候、察する二かの学問二て八、考証学斗之江戸へ

出候て八、決而行八れましき事と相考申候、早く帰れ八

よしと存候也、御内分、以上

「第十二消息(嘉永四年五月廿三日)」一六・二×八四・八纏

尔来御疎遠打過申候、向暑之節御坐候処、

御全家益御多祥可被為在、欣慶之至二奉存候、

随而弊家無異消光仕候間、乍憚御省意可被下候、

三月十日之華翰、同月末二や相達拜見仕候、

早々貴答可申上候処、三月中旬より上京仕、

その名残二而色々多忙之事出来、且其内二八

前書之御報も到着可仕とて、一日ツ、等閑二相成

竟二及今日候段、御恕免可被下候、尊大人  
 御遠行之御悔八嚮二沈々申上候、尔来定而万事  
 御多忙二可被為入と奉遠察候、但御社家ゆゑ  
 御服中八御社頭の事なと八却而御閑二やとも  
 奉存候、近況如何御しらせ可被下候、小生事も  
 凶年の今中<sup>（中）</sup>にて、色々世話敷事斗二而大二  
 困り果申候、ヤハリ窮鬼身にまとひ難居し  
 よわり居申候、夫故恒の心もなく学業も半八  
 廢し居申候、御憐察可被下候、三月上旬宮内  
 之高雅上坂、同道して京へ上り、下旬二帰宅、高雅八  
 ぬての舍社中にて講尺なと始め、大二行八れ候由  
 にて、五月十日頃帰郷仕候、其外紀州之諸平  
 五月十八日忽然と出来、書林河喜方分拙生ヲ呼二  
 おこせ申候、廿日參逢申候、狂氣と申体八更になく  
 候へとも、何角憤慨むね二満候体にて、上向へ憚候事を  
 述候段八一切条理聞え不申候、夫故狂人のやう二も  
 聞なし候事歟、何分二も浪人して哥よみ二なり候  
 覺悟と聞え候間、頻二諫め置申候、廿三日頃迎の人  
 来りつれ帰候よし、夫故一會きり二而逢不申候、  
 何分気毒なる体二見え申候、翁満八三月中旬  
 帰国、伴雄八四月四日上京、今以ちかふ方二滞留  
 いたし居申候、かも川三郎此節請あいのよし申こし候、  
 さるほと二拙生も明廿四日分乗船播州へ出申候、  
 諸所奔走して盆前後帰宅のつもり二御坐候、  
 夫故念忙無限ノ人とも一寸御一左右申上置候也、  
 近藤氏も出行相止候よし、いかなるわけニや  
 先頃細書来候へとも、右之次第二而返答不致候、  
 此度少々申遣候間、乍御面倒御達し可被下候、

静間へ八今度八此旨宜御達し可被下候、宮城  
 大荒子の状御役介二奉存候、同人ヤハリ貴宅二逗  
 留のよし、何卒此方へ出られ候様二と、先頃より  
 心組候事も有之候へとも、今少し小生方活計  
 むつかしき故招キも不致候、乍去品二より秋頃八  
 上られ候様二可申通事も御坐候間、緩々辛抱致され候  
 やう二御伝へ可被下候、別二八返事遣し不申候、さて又  
 先頃上京之序、河原町御屋敷二而弘氏ヲ尋候処、  
 殿様御通行故、伏見へ出られ候留守二て不対面  
 残念二奉存候、尔来八是へも御無音いたし居申候、  
 隨筆集近々あつまり候間、先達而の稿  
 御返し可被下候、且又直養へ御便御坐候八、御せり  
 立可被下候、貴兄二も早々御出し可被下候、  
 金吉<sup>（中）</sup>御越し被下慥二入仕候、諸算用  
 細密二可申上段承知八仕候へとも、拙生事も  
 いはゆる帳面二記し候事なと一切いたし不申候、  
 夫故何角入組候而よくも覺えられ不申候、  
 何卒貴家二而御取しらへ被下御算用可被下候、  
 一度スツハリ致候上二て八、尔後八夫々書付置可申候、  
 拙生他行中二てもヤハリ御状八留守へ御こし  
 可被下候、近地故早々相達し可申候、与介不相替  
 まめやかに参り、便宜のさいそくなといたし申候、  
 実二朴人感心也、をりく御ほめ可被下候、当時八  
 さつまやしき名代中嶋屋と申方二居候よし、  
 尊大人之御悔別帛認差上候様二託し候へとも、  
 例之多忙故、別二八認不申候、其分二て宜御返事  
 可被下候、

遺文集覽八本屋二て不残文をさせ候ゆゑ、

私方二八一部も無御坐候、夫故さし上不申候、

御奉納哥色々ちらし置候へとも、とかく当地

などの者八出し不申候、こまり入申候、

玉石集大方落成のよし早々御発行

奉祈候、尔来八此方へ御託し可被成候、金さへやれ八

日限をしても彫立申候事二御坐候、かやうの事八

気かぬけて八をかしからぬ事二相成可申候間、此段

あらかしめ申上置候、

書外申上度事、如海山候へとも、も八や黄昏二相成

大二世話敷候故申留候、早々御返書承度奉希候、

乍末御家内様方へ宜御致声可被下候、

草々不備

五月廿三日

萩原広道

拝

鈴木老雅契

玉几下

尚々時気御いとひ奉祈候、以上